少女探偵

器用貧乏

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

少女探偵

【Nコード】

N68240

【作者名】

器用貧乏

【あらすじ】

芝井探偵第3弾。しかし今回芝井は登場せず。代わりに姪の迷推理が冴え渡る？

プロローグ

「直美、一緒に帰ろうよ。」

筆記用具をランドセルにしまっている時に横から声がしたので声のする方へ顔を向けると、同じクラスの優子がニコニコしながら私の机に近づいてきた。優子とは今の学年のクラス替えの際、席が隣同士だったのをきっかけに仲良しになった友達だ。どうやらお金持ちの家らしく、身の回りの物から着ている服まで私とまるで違っている。正直若干の嫉妬を覚えるが、母の苦労は幼少時から知っているので贅沢なんて言ってもらえないし、叔父が近くにいるが探偵なんてして置いて、たまに世話になるが仕事をしているところなんてほとんど見たことない。この前なんて昼間っから一緒にテレビ見て過ごしたし（『ある女性の選択』参照）。まあ私から見ても頭の回転は速いんだろうと思うけど、仕事が来なきや意味ないもんね。もう少しシャキッとしてお母さんのこと助けてくれればいいんだけど、期待はできないな。はあ と無意識にため息が出る。話が脱線してしまった、ええと、そうそう優子のことだ。当の本人は自身の境遇を鼻にかけるわけでもなし（少なくとも私に対しては）、人懐っこく私に話しかけてくれるので仲良くしている。

「うん。」

私は考え事を取っ払うようにはっきりした声で言った。

「今日返ってきた国語のテスト、直美は何点だった？」

下校途中、優子が話しかけてくる。

「75点だったよ。」

私は正直に答える。

「そっか、私は87点だったんだ。あゝあ、また塾の先生に怒られ

「ちやうな。」

優子は苦笑いしている。が、私はこの子は幸せ者だな と思った。今の会話ひとつ取っても他人の反感を買ってしまう虞があることに、本人は気づいていないのだ。他人の気持ちや推し量ることに欠け、何不自由無く暮らしていることに慣れてしまっている。しかし、それは私にとつてはどうでもいいことだ。彼女の人生は彼女で決めれば良い、そこに『私の色』が入る余地も必要も無い。

などと考えている直美をよそに優子は好きな男の子の話や服装の話などをとりとめもなく話し続けている。ふんふん、と相槌を打ちながら聞いていると直美は十字路隅の電信柱の横で小さな女の子が泣いているのを見つけた。通行人はその女の子に話しかけるわけもなく、ただ遠巻きに通り過ぎていくだけである。冷たい世の中だな、とため息を付きながら 直美は女の子に近づき、出来るだけ優しいトーンで話しかけた。

「どうしたの？」

しかし女の子は直美をチラッと見た後も嗚咽を繰り返すだけで無言のままだ。どうしようか、と思案し無意識に優子の方へ顔を向けると、優子は急に思い出したかのように

「私、今日は塾があるから先に帰るね。ごめんね。」

と言い出した。私は瞬時にその意味を悟ったが、表情を変えずに「うん。後は私がなんとかする。」と小さな女の子を見つめながら答えた。私の返事を聞くや否や走り去る彼女の姿は見ないようにした。見たくもなかった。面倒なことが起きる（又は起きそう）と逃げようとする大人の姿を見て、子供は育っていく。助けたい気持ちはあるんだけど、と言いつつながら結局は行動に移せない勇気のない大人の姿を見て、子供は育っていく。そしてそれはメビウスリングのように一方では美しく、一方では歪んだ形で現代社会に溶け込んでいる。

「どうしたの？」

もう一度呼びかけて見た。が、状況は変わらない。

「私は北条直美っていうの。あなたのお名前は？」

女の子の嗚咽は止みかけていたが、まだ話してくれそうにない。女の子が落ち着くまで少し女の子を観察してみよう、と直美は考えた。年齢は5・6歳といったところかな。服の胸のあたりに針で刺したような跡があるな。これは見覚えがある、名札を安全ピンで刺していた跡だ。ということは小学生の低学年かな、それにしても私の学校では見かけたことのない顔だけど。よく見ると目が大きくクリツとしているし可愛い子だわ、泣いている顔もなんとなく様になっっているし。将来、男に付きまとわれて困るんじゃないかしら。ああダメダメ、また脱線してしまった。要するに、小学生らしいけど私の学校の生徒ではなさそうだということは。

「迷子になったのかな？お姉ちゃんと一緒にお家に戻ってあげるからね。気持ちが落ち着くまで待つてるからね。」

こういう口調は慣れなくて恥ずかしいのだが、女の子には気付かれないだろう。女の子の真横に座って泣き止むのを待った。「待った」のは女の子の気持ちを大切にできなかったからだ。自分の意に反して強制的にさせられたことの結果が良かった試しなんて一度も無い、そしてそれは年齢の長幼に関係しない。私はまずこの子を安心させてあげなければいけない、話はそれからだ。

20分、30分と時間が過ぎていく。その間通行人は通れど、目を合わせるとサツと逸らすか見て見ぬ振りをする人ばかりだった。助けて欲しいとはこれっぽっちも思っていないが、形容しがたいモヤモヤした心の中で一つの決意が固まった。私一人の力でこの子を家まで送り届けよう、と。

謎？

「お嬢ちゃんたち、どうかしたの？」

振り返ると、一人の青年　　30代前半だろうか　　が立っていた。本人は愛想よく振舞っていると思っっているのだから、無理やり作ったような笑顔は逆効果でかえって怪しげに見える。この年代でこの時間帯にここにいるということは、たぶん無職なのだろう。関わりを持つことは危険だ、私の五感がそう訴えかけていた。

その時、服の袖辺りに感触を覚えた。見ると、女の子が私の袖をぎゅっと握り締めていた。小さな手からは小刻みに震える振動を感じる。私は女の子の頭を撫でて、小声で「大丈夫だよ」と囁いた。

「妹が泣いているのをあやしているだけですけど、何か？」

私は親の仇を睨みつけるかの如く鋭い眼差しで男に言い放った。この一世一代の演技が功を奏したのか、男は「いや何も」とぼそぼそ呟くように言うとその場から去っていった。

ふう、と一息つく。あ、そうだ。今なら女の子も少しは話してくれるんじゃないだろうか、一つの危険を取り除いたことで私への警戒心は解け始めてくれてればいいんだけど。

「どこから来たの？」

今度は女の子に対して今まで生きてきた中で（と言っても10年だが）最高の愛想笑いを浮かべながら話しかける。明日は絶対に頬は筋肉痛ね、と心の中で思った。するとその甲斐あってか、ぐすんぐすんと鼻を嚙りながら女の子の唇が小さく動いた。

「ち　かい　しょうが　っこう」

女の子はそう言いながら人差し指で道を指した。そしてまた黙り込んでしまった。もともとが内気な性格なのかもしれない。

「ちかいしょうがっこう。なるほど、ここからこの方向の一番近い小学校があなたが通っている学校なのね。よしよし、もうすぐ帰れるからね。歩けるかな？じゃあ、行こうか。」

私は女の子の手を握って、女の子が指し示した方向へ歩き出した。

「一番近いのはこの第二小学校よね。」

歩き出してから15分くらいで目的地に着いた。自分が通っている小学校からだったら帰り道はわかるだろう、私は肩の荷が下りた気分で女の子に話しかけた。

「はい、あなたが行ってる小学校に着いたよ。ここからならお家、分かるよね？」

しかし意外にも女の子の表情に安堵の色は無かった。私は首を傾げながらも女の子に質問した。

「ここ、あなたが通っている学校じゃないの？」

すると女の子はコクン、と頷いた。

私は少なからず動揺した。ここじゃなかったら、もうこの方向は校区の外に出してしまう。校区外の学校である可能性もあるが、こんな小さな子がそこまで歩いて来れる距離なのだろうか。私はその可能性は低いと判断した。とりあえずこの校区内の第三、第四小学校を回ってみようか。因みに第一小学校は私が通っている学校なので省略してもいいよね、などと思い巡らせながら再び歩き出した。

「うーん、ここでもないとするともうこの校区じゃないね。」

第三、第四小学校を回り、女の子に聞いた後ため息混じりに呟いた。女の子は無言ながらも私の手を握り、ついて来てくれるので少しは信頼してくれているのかもしれない。だからこそ、尚更無事に家に送ってやらなければ。もうそろそろこの子のお母さんも心配しているかもしれない。頭をフル回転させて考えねば。

「よし、最初の場所に戻ろう。あそこからまた一から考え直そう。」

踵を返し、歩き出した。

「すべてはここから始まったのよ。」

私たちが出会った場所に辿り着いた後、小説がかった台詞を吐き、名探偵が乗り移ったかのように目を細めて思案していた。

「今度は逆の方へ行ってみようかしら。」

当初女の子が指し示した方向と逆の方へと歩き出した。というのも十字路になつている内の三方向はさつき歩いた学校の校区に含まれており、可能性が極めて低いと判断せざるを得ないのだ。残りの方向は少し行つた後、大きな交差点を挟んで別校区になる。その先へは私も行つたことがない。もうこれが間違つていたらお終いね、弱気なことを考えながらも決して表情には出さないように気を付けた。女の子を無事に家まで送って可愛い笑顔を見るんだ、そう誓つて力強く歩き出した。

「やみくもに歩いてても駄目よね、それでなくても知らない土地なんだから。」

交差点を渡り、別校区まで歩いたところで立ち止まって考えた。

「どうすればいいかな、あつ、あそこに地図があるわ。」

女の子を連れて地図のある道路わきに移動した。

「え〜と、現在地が赤く記されているここですよ。ここから女の子が歩ける距離の小学校はと。あつ！あ〜！」

目の玉が飛び出るぐらい大きく目を見開いて叫び声を上げ、その後「あははははは！」と大笑いした。通行人が怪訝そうな顔でこっちを見ているが、そんなことはお構い無しに笑い続けていた。

謎が解けた？

笑い疲れて声が続かなくなった後、ふうつと息を吐き真顔に戻り女の子に向かつて言い放った。

「謎は全て解けた。」

女の子はいつもより強い力で私の手を握り締めている。先程の奇声を上げての大笑いが再び恐怖を生んだのかもしれない。が、それも後少しの辛抱だ。直美はたぶん理解できないであろう女の子に対して謎解きを開始する。誰でもいいから聞いて欲しかっただけなのかもしれない。

「まず最初に考えなければいけなかったことは、女の子が小学校1・2年生だつてことなのよ。この大前提が理解できていればものすごく簡単。女の子は『ちかいしようがっこう』と言った、それを私は『ここから一番近い小学校』と解釈した。けれど小学校1・2年の子が他の小学校と比べて『近い・遠い』なんて明確に判断できるかしら？無理よね。次に女の子が指差した方向について考えてみようか。女の子が迷子になっていたのは間違いないわ。自分で帰ることが出来ないんだから、そこは知らない道だということも容易に想像がつくわね。当然あちこち歩き回ったでしょう、そしてとうとう立ち尽くして泣き出してしまった、というところかな。ここで考えなければいけないのは、女の子は小学校がある方向が分かっていたのか？という点ね。知らない道を歩き回って、知らない十字路で立ち止まって、自分の通っている学校がある方向を正確に示すことができるかしら？これは私でも無理だわ。つまり女の子が指し示した方向とは『学校がある方向』を指したのではなく、『こっちから歩いてきた』と示したに過ぎないのよ。この2点を踏まえた答えが」

一呼吸おいた後、先程より声を大きくして言った。

「この地図よ！」

指先である場所を指した。示された場所には『知香井ちかい小学校』と

書いてある。

「ふふつ、思わず爆笑してしまったわ。何てことはない、謎なんてはじめから存在しなかったのよ。だって女の子は純粹に小学校名、すなわち答えを言っていたんだから。」

『一人相撲』 今の私以上にこの言葉が似合う人など世界中どこを探してもいないだろう、と自嘲気味に笑った。

エピソード

知香井小学校に向けて歩き出すと、女の子も徐々に見知った場所になってきたのか歩くテンポが速まってきた。疲れているにもかかわらず、もうすぐ役割を終えたと今では寂しい気持ちにすらなるのが不思議だ。もう少し冒険したいな、とも思う。が、女の子の手の温もりと握り締めている力の強さがもうすぐ帰れる、もうすぐママに会える、と喜んでいるのがひしひしと伝わってくることを考えるとそももいくまい。言葉以外にもこういう気持ちの伝え方があるんだな、と実感した。私に手を引かれてずっと歩いているこの子も相当疲れているはずなのに、たいした話もしていないけど文句一つ言わなかった。良い子だな、今日別れたらもう一生会うことはないだろうけど、どうか幸せになって欲しい。

「ママー！」

女の子が大声を出して急に走り出そうとするので、握っている手を離さないように早足でついていく。

「みーちゃん！良かった、遅いから心配したのよー！」

どうやらこの人がお母さんのようだ、私は女の子の手を離れた。母親が女の子を抱き上げると私と目を合わせた。母親の目は赤みがかっていて、瞼には今にもこぼれんばかりの涙をためていた。

「あなたがここまで送って下さったんですか？どうもありがとうございます。」

深々と頭を下げられたので恐縮してしまう。相当心配していたのだろう、憔悴している様子が伺える。

「いえいえ、礼には及びません。わたしもこの子といろんな場所に行けて楽しかったですから。」

と言つて、女の子の頭を優しく撫でた。まあ、いろんな場所に行つてしまったのは私に責任があるのだが、あえて恥を晒すことはないので黙つておこう。

「では、家に戻ります。ほら、みーちゃんもお姉さんにありがとうを言いなさい。」

母親に抱きかかえられている女の子は、頭だけをくるつと私の方へ向け小さな唇をかすかに動かした。声は聞こえなかったが口の動きから、ありがとう、と言っていたのだらう。そして初めて、ニッコリと笑つた。

その瞬間、今日起こつた煩わしかった事や疲労は全て吹き飛び、体中に喜びが満ち溢れた。何物にも代えることが出来ない気持ちがあるということを目に沁みて感じた。

母親に連れられて離れていく女の子は何度も振り返り私の方を見た。私は涙が出ないように必死にこらえながら、笑顔で手を振つた。

女の子が見えなくなるまで見送つたあと、自分の手をじつと見た。あの子の温もりは消えていたが小さくやわらかい感触はかすかに残つていた。私はふふつと微笑み、反転して歩き出した。

「今日は良い日だったな。」

夕日に照らされ赤みを帯びた雲を見ながらしみじみと呟く。ああ、そうだ。ついにあの子の名前聞き出せなかつたな。お母さんは『みーちゃん』って呼んでたな。美樹、美奈かな、いや美優かも。なんてことを考えながら歩いていたら知らず知らずの内に自宅前に辿り着いていた。

働きに出ている母はいつも私より遅く帰ってくる。ランドセルを部屋に置いて一段落つくと、ワクワクした気持ちで母の帰りを待った。

母に今日の話聞かせてやるんだ、私、今日探偵になつたんだ

『う』

了

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6824o/>

少女探偵

2010年11月11日19時24分発行